

第二十九回 菊池寛ジュニア賞 小学校の部 最優秀賞受賞

「柿の木図書館へいらっしやう」

高松市立太田南小学校 六年 濱口 梨子

『今月末をもって、閉館させていただきます。』

柿の木図書館のどっしり構える入り口にこんな紙が貼られたのは九月一日のことだった。ここ何年かで利用者がどんどん減っていて、今までにも何度か検討されたことがあったが、ついに閉まることになったようだ。ちらほらやって来る人達は貼り紙に気付いてため息をついた。しかし、誰にも見えず、声も聞こえないが肩を落とした人はもう一人いたのである。

それは、正確に言うと『人』ではない。先祖代々柿の木図書館を守ってきた三代目図書館の神だ。世界中の誰よりも、この壁の木目や紙とインクのおいが漂う空間を愛している。この図書館にある本ならその場所も、どんな内容かも全て把握している。そして、来館者の表情からぴったりの本を見つけて気配で案内したり、破損した本を直したり。見えないけれど一生懸命だったのに……。その努力の結晶がパリンと砕け散った気がした。ガックリとうなだれた神様に、図書館の空気が囁いた。

—お願い、お願い、あと一か月でどうかして。閉館なんて嫌だ。

ふわりと鼻をくすぐる温かなにおいに応えようと神様は顔を上げた。わしが閉館をやめさせてみせる！

さあ、どうしたものか。今日は誰も来ないではないか。外では最後の力を振り絞って鳴く蝉の声にまぎれて、明らかに自然のものではないゲーム機の音が響いている。

「もうちょっとだぞ、殺せ、殺せ！」

少年の大きな声に、神様は何という言葉遣いなんだろうと呆れ返った。図書館にある本の中にはもっと優しくて繊細な言葉がたくさん綴られている。なのに今、この世に吐き出されたそれはなんて汚くてナイフみたいに鋭いだろう。そんな言葉は柿の木図書館には似合わない。フッと背を向けると神様は館内に戻った。

九月五日、雨粒の奏でる音楽を神様はむっつりした顔で聞いていた。すると、じっとりした空気をさらにどんよりさせることが起こった。書庫にある古い本が次々とトラックに積みこまれていく。やがて、ガシャン・ブロロロという音と共に走り出したトラックがだんだん小さくなり、角を曲がって見えなくなった。書庫の中は前よりもガランとしてさみしい。

ああ、どうすれば…… 神様は埃がぶかぶか浮かぶ空間を眺めた。同時に、図書館の誇りもぶかぶか飛んでいくような気がしてしまう。

九月七日の夕暮れ時、茜色の夕焼けが反射するガラスの扉に端がクシャツとなった紙が貼られていた。

『しまっちゃんなんて、いや。』

ピンクのペンで書かれた文字はヒヨロヒヨロして幼かったが、その字からは気持ち伝わってくる。クチャクチャの紙に子供の祈るような顔が見えた気がして、この子のためにも閉館をとめなければと神様は気合いを入れた。

翌日。少しやわらいだ暑さが心地よい。外に植えられている「スモスが薄紅色や赤紫色の見事な花を咲かせ、深い青色の空にうろこ雲がどこまでも広がっている。ああ、なんてのどかなんだ。神様は外の空気を吸いたくなくなった。ん？花だんの中にゲーム機が落ちている。数日前からあったのか、うっすらと土がかぶさっていた。サワサワと風にゆれる花の中で、冷たく光る本体は目立つ。

「本の敵だ！こんなものはいらん！」

パチンツと指を鳴らすとゲーム機は消え失せた。神様はスッキリした。

九月九日、夕暮れ時に二人の子供がやって来た。先に来た小学二年生の女の子は、数少ない常連の一人だ。毎週お気に入りのシリーズを借りに来ている。本をつかんだ小さな手にはピンクのインクがついていた。それからしばらくたって、四年二組と書かれた名札をつけたままの男の子がかけこんで来た。ハアハア息を切らしている。いきなり、バンツとカウンターのたたいた。

「僕のゲーム機、知らない？」

この前、図書館の外でゲームをしていた子だ。おそらくおととい消したゲーム機は彼のものだったのだろう。敷地内でゲームなんぞをするからじゃ。神様はキツとにらんだ。

十一日の朝。新しい太陽の光が入り口のガラスを輝かせている。気持ちのよい朝だと大きなあくびをした神様の目に、またシワシワの紙が映った。『しまらないでください。』と「ピンクのペンで書かれている。昨日の女の子にちがいない。やっぱりここを必要としている子供はいるんじゃない、そんな子がもっと増えたらいいのに。」

「たくさんの子に本の魅力を伝えるには、どうしたらいいのだろうか？」

十二日。神様は白くて大きな用紙に『子供ビブリオバトル、参加者募集』とタイトルを書いた。子供がいつばい来ますように。つばやきながらペンに力をこめる。以前は時々この企画をやっていたが、何年か前からはルールや楽しさを知る子が少なくなって開催していな

い。ビブリオバトルは、本の戦いだ。それぞれおすすめの本を持ち寄って指定された時間内に魅力を紹介し、読みたくなかった人が一番多かった本の勝ちとなる。色鉛筆でいい絵に絵を描いたポスターを「पी」し、一枚を掲示板に貼る。残りも町中の家のポストへ滑りこませた。みんな集まってくれるだろうか。神様はそわそわしてよく眠れなかった。

窓からのぞく大木にはまだ固そうな柿の実が鈴なりになっている。今日は二十日、ビブリオバトルの当日だ。いそいそと会場の部屋へ向かった神様は目を疑った。たくさんの子供が笑っている。まだあどけない子から中学生くらいの子まで男の子も女の子も目を輝かせている。ゲームやSNSをする子が多い中、本に興味がある子はこんなにいるんだ。司書さん達が何事かと顔を出している。残念ながら神様は人間の目には映らないし、声も聞こえない。正面のホワイトボードにペンで簡単な自己紹介とルールを書いた。子供達にはペンが浮遊しているように見えるらしく、おばけだ、ゆうれいだとさわぎ出してしまった。カツカツ、ペンが進む。『まあまあ、静かにしようではないか。さっそく始めるが、最初に行きたい子はいるか?』

ペンを置く前に、元気いっぱいな女の子が勢いよく進み出た。手には、ピンクのペンで書かれたメモを握っている。ざわついていた部屋が静まった。

「あたしのおすすめの本は、『魔女の宅急便』です。」

時々、目を見開いたり眉を下げたり。表情豊かに話している。

「……続きは本を読んでみてください。」

ピピッとタイマーが鳴る。いくつかの質問に答えた後、女の子は飛び跳ねるような足取りでもとの位置に戻った。すっと戸が開いて、今はやりのゲームキャラクターのTシャツを着た男の子がそろそろと足を踏み入れた。一番後ろの隅っこに座る。

発表は順調に進んでゆく。ついに大トリ、六年生の男の子の番になった。

「みなさん、チョコレートを食べたことはあると思います。甘いものがない世界なんて想像できますか」

みんなが身を乗り出す。

「舞台は現代のある国です。健全健康党が権力を持ち、チョコレート及び甘いものは禁止されました。」

ハラハラ、ドキドキ。子供達は今にもこの本のある棚へ走っていきそうだ。

結局、勝利した本は『チョコレート・アンダーグラウンド』だった。神様はその日紹介された本をありったけ持ってきて机に並べた。子供達は我先にと手を伸ばしている。一人だけ動かない子がいた。数分たってからふらりと立ち上がり、一冊手に取って席に戻る。すると、

男の子の手元がぼわんと光を放った。本の脇に傷だらけのゲーム機が現れた。神様はその子にウィンクする。彼はそっとポケットにゲーム機をしまった。

カツカツ。『閉館をとめたい。でも、どうすれば……。』神様が書き始めるやいなや、一人がダダダダッと廊下へ飛び出した。他の子も続いて走り出す。

「おねがいです、へいかなんかやめてー！」

「僕は図書館が大好きなんだ。」

貸し出しカウンターから子供達の声が聞こえる。居合せた来館者らも加わっていく。図書館の存続を願う声がやむことはなかった。

柿の木図書館のどっしり構える入り口近くには大きな柿の木がある。十月十五日、そこにはツヤツヤした実がわんさとなっている。紙とインクの香りがして、暖かく過ごしやすい室内はいつも子供達でいっぱいだ。ハロウィンの飾りが展示され、おすすめの本がよく使われて飽色^{あせいろ}に光る本棚で紹介されている。この空間には、人を傷つける汚い言葉はない。心がホッとするような言葉であふれている。図書館は誰もが幸せになれる特別な建物だ。『魔法の宅急便』の二巻目を抱えた女の子がピンクのペンがついた手で神様の肩をトントンとたたいた。

「神様、ビブリオバトル、もう一回やりたいな。」

相変わらず輝いている瞳は真つすぐ神様を見ている。えび^{えび}ちよつと待った、お主……。

わしは、いつでもここにおる。嬉しいことがあった日も、悲しいことがあった日も、いつでも柿の木図書館へいらっしやい。